

一刀領談

本紙客員論説委員 下條正男



しもじょう・まさお 長野県出身。国学院大学院博士課程修了。1999年から拓殖大教授を務め、今年3月末で退官。現在は本紙客員論説委員、島根県立大と東海海洋研究所の客員教授。島根県の竹島問題研究会の座長を務めた竹島研究の第一人者。71歳。

徐敬徳氏のプロパガンダ

島根県竹島資料室の夏休み企画展示「二ホンアシカがあらわれた！」が8月30日まで開かれた。その最終日に、韓国の広報専門家を称する大学教授、徐敬徳氏による企画展示を見た。「歴史理解」こそ、「常

批判に歴史的根拠なし

時嘘つき中」の一例なのである。 竹島資料室が「夏季企画展開催中」とした広告を、「島根県常時嘘つき中」とした徐氏が、「アシカ猟をしていた日本の漁師たちに対し、江戸幕府は1695年に『朝鮮領であるためアシカ猟は禁止する』という内容の判決を下しました。その後、日本は独島(竹島の韓国名)にこれを記録した立て札まで設置していました」としていたからだ。

■「常時嘘つき中」

とはいえ、韓国では徐氏の「島根県常時嘘つき中」をパロディーだとして、一部の人士は大喜びである。しかし、そこにはユーモアもなければ皮肉もない。それは日本批判のためのプロパガンダだからである。 この状況は、東アジア全体にも悪しき影響を及ぼしていく。少なくとも隣国との間では、相互理解をする試みが欠かせないが、徐氏による、日本をおとしめる一連の「ディスカウントジャパン」の策動は、確実に日韓を離反させているからだ。この現状は日本だけでなく、韓国にとっても望ましいことではない。

だが、竹島問題に関心のある人なら、徐氏の「歴史理解」に首をかしげるだろう。江戸幕府が96年正月、鳥取藩米子の大谷・村川家に対して、竹島(現在の鬱陵島)への渡海を禁じたのは、対馬藩が鬱陵島は朝鮮領である、と申し出たからである。それに大谷・村川

島根県の広告(上)と徐敬徳氏が公開したパロディー広告(下)をフェイスブックより



地図に竹島があるのを問題とし、旭日旗を戦犯旗として、その使用禁止を国際オリンピック委員会(IOC)に求めたという。

徐氏にとって旭日旗はナチス党の鉤十字と同類で、慰安婦問題はホロコーストと同じだからである。「ドイツは謝罪したが、日本は竹島の領有権を主張し過去を反省していない。日本には謝罪と反省をさせなければならぬ」。これが韓国側の「歴史認識」である。

韓国がドイツと日本を比較するのは、ドイツとフランスは共同の歴史教科書を作って和解が進んだ半面、日本は竹島を日本領と主張し、過去を反省していないと思っているからだ。

■比較対象は仏韓

しかし、韓国側が比較する対象はドイツと日本ではない。フランスと韓国である。フランスは韓国のように、敗戦国日本が国際社会の復帰する3カ月前に「李承晩ライン」を引いて竹島の領有を主張し、ドイツ漁民を拿捕抑留したであろうか。しかも韓国政府は、朝鮮半島に残された日本側資産52億ドルの持ち出しを阻止し、日本に密航した朝鮮半島出身者の送還を拒むための外交カードとしたのである。

戦後、日韓はその立場を逆転した。竹島を侵奪された島根県が二ホンアシカ企画展を開くことが、どうして「島根県常時嘘つき中」となるのであろうか。 日本政府も「遺憾だ」というだけの「遺憾砲」ではなく、実効性のある対応をしなければ、日本国民から見捨てられてしまう。島根県では『日韓の中学生が竹島(独島)問題で考えるべきこと』と題した小冊子を刊行し、韓国語訳もできている。外務省の英断で、それを駐韓日本大使館のサイトで公開し、徐氏に学習してもらってはどうか。